

【研究レポート】

川越人足は入れ墨を入れていたのか？

シーボルト・コレクションから見る大井川の川越人足の実像
学芸員 岩崎 アイルトン望

はじめに

江戸時代、幕府による渡船・架橋禁止下の大井川で行われた「川越制度」^{かわごしせいど}は、宿場の支配から独立した制度であった点、大井川の増水による「川留め」という自然事象を逆手に豊かな文化を育んだ点から、東海道の交通史・文化史を考えるうえで欠かせない歴史である。

しかし、この川越制度を支えた川越人足たちの実像^{かわごしにんそく}については、謎に包まれた部分が多い。大井川の川越人足を撮影した写真等は現存せず、彼らの姿を知る手がかりは主には浮世絵に頼るばかりであった。歌川広重の「東海道五十三次」^{とうかいどうごじゅうさんつぎ}や葛飾北斎の「富嶽三十六景」^{ふがくさんじゅうろくけい}に代表されるように、江戸後期に風景画として確立した浮世絵は、庶民も購入できる土産物として人気を博した。江戸時代に日本一の交通量を誇った東海道の浮世絵は様々な絵師により描かれ、大井川を題材にした作品も19世紀初頭以降に風景画として多く描かれた。

大衆向けの娯楽物として制作された浮世絵は、必ずしも題材を正確に描いているわけではなく、多少のフィクションや誇張表現を孕んでおり、大井川を題材にした浮世絵も例外ではない¹。したがって、大井川の川越人足の実像を考察する以上、日本人絵師により制作された日本人視点からの浮世絵以外の資料調査も必要といえる。

令和4(2022)年、島田市博物館にて開催した「第 89 回企画展 日とつる奴らは渡れない！カワゴシチャレンジャーズ」(以下、カワゴシ展)では、文政6(1823)年に来日したドイツ人医師シーボルトが描かせた「大井川の川越人足」の絵2点を調査し、拡大資料画像を展示公開した。本資料は、シーボルトが祖国ドイツへ持ち帰った大量の日本資料群(通称「シーボルト・コレクション」)の一部である。現在はドイツのミュンヘン五大陸博物館に収蔵されており、カワゴシ展ではミュンヘン五大陸博物館の担当学芸員と調整の上、2点の資料の拡大画像を公開した。本資料に描かれた川越人足の姿は日本の浮世絵に描かれたそれとは一線を画し、新たな川越人足像の手がかりとなる貴重な資料である。

本稿では、シーボルトが描かせた、入れ墨を入れた大井川の川越人足の絵2点の資料解説、シーボルトによる日本文化の調査・記録、日本における入れ墨文化の点から、大井川の川越人足の新たな実像を検討していきたい。

資料紹介

シーボルトが長崎 出島出入り絵師^{かわはらけいが}川原慶賀(天明6(1786)年～没年不詳)に描かせた大井川の川越人足の絵は計6点あるが、その内2点の高画質画像をミュンヘン五大陸博物館より提供頂き、カワゴシ展にて「川越人足 幽霊と卒塔婆の刺青」、「川越人足 雲龍の刺青」として展示した。

この川越人足の絵6点は、シーボルトがドイツ帰国後に著した『NIPPON』の図録に収録されている「OIGAWA」(図1)という絵の中に描かれた川越人足の単体原図であることが確認でき、本資料に描かれている川越人足が「大井川の川越人足」であると断定ができた。

・川越人足 幽霊と卒塔婆の刺青 (図2)

禪 一丁の川越人足の後ろ姿が描かれている。

右腕に墓石と卒塔婆、左腕に「南無阿弥陀仏」の文字、左の尻に^{どくろ}髑髏、背中全面には笑う幽霊の入れ墨が彫られている。腰には黒色の煙草入れと煙管が下げられている。また、用途は不明だが両手に棒状の道具を手に行っている。

・川越人足 雲龍の刺青 (図3)

禪 一丁で腕を組む、首から鉢巻を下げた川越人足が描かれている。

全身に雲と龍の入れ墨が施されている。右肩に龍の顔、左肩に龍の足が見られることから、背中には龍の胴が彫られていることが窺える。腰には赤色の煙草入れを下げている。

川原慶賀とシーボルト・コレクション

フリッパ・フランツ・フォン・シーボルト(寛政8(1796)年～慶応2(1866)年)は、日本の蘭学・医学の発展に寄与したドイツ人医師として知られている。しかし、シーボルトを「日本に近代西洋医学を伝えた外国人医師」と、教科書通りの偉人として片付けるのは早計である。

シーボルトは大学で医学を修めたが、その他にも動物学・植物学・地理学など幅広い学問を学んだ。大学卒業後はドイツの小さな町で町医者として働くものの、自身の強い学問的探究心に従い、文政5(1822)年に当時世界中の国々と貿易を行っていたオランダの陸軍軍医となった。シーボルトは、鎖国体制を数く日本にとりわけ興味を示した。文政6(1823)年8月、長崎のオランダ商館医として来日を果たし、日本国内で

¹ 東海道の宿場や名所を描いた浮世絵では富士山が作品内に描かれることが多く、大井川を題材にした風景画では本来とは異なる方向に富士山が描かれている作品が多々存在する。

植物標本や動物標本などの資料収集を行い、滞在中に目にした習俗・文化・人々の詳細な記録に邁進した。この収集資料群は、シーボルト・コレクションと呼ばれ、シーボルトの日本への多大な関心が窺える。近年、シーボルト・コレクションには江戸城本丸の図面や日本国内各所の測量図など軍事的・政治的資料も含まれていることが判明した。鎖国体制下唯一の欧州交易国であったオランダ政府は、近い将来日本が開国した際に対日外交の主導権を握るため、シーボルトに日本国内情勢の内偵を課していたのである。

また、シーボルト・コレクションに含まれる、文政9(1826)年の江戸参府の道中、シーボルトに随行した絵師 川原慶賀が描いた当時の日本の景色や文化、習俗、職業人等のスケッチは、19世紀初頭の日本の鮮明な姿を記録した非常に貴重な資料である。慶賀の生涯については資料不足から判然としない部分も多いが、文化8(1811)年頃から長崎の出島出入絵師として活動し、オランダ商館長ヤンコック・ブロンホフとの交流が確認できることから、文政6(1823)年のシーボルト赴任時にブロンホフ経由でシーボルトと交流を持ったと推察される。

日本調査の密命を帯びていたシーボルトは、慶賀に対して可能な限り写実的な絵を描くよう命じた。慶賀は、シーボルトの求めに応じて日本各地の風景、庶民の姿などの風俗画、動植物画など幅広いジャンルの絵を描き、それらの資料の多くはシーボルト・コレクションとして伝わっている。シーボルトは、自身と共に来日した研究助手ハインリッヒ・ビュルガーへ送った書簡(天保元(1830)年12月22日付)で、慶賀の描いた精密な動植物画を褒め称え、彼が慶賀の技術を認めていたことが分かる。客の注文に応じて絵を描く町絵師として様々な技法を有していた慶賀は、シーボルト来日以前から出島にて、ブロンホフなどのオランダ商館長や商館員の求めに応じて様々な絵を描き、自身の技術を高めていった。シーボルトはそんな慶賀の日本人離れした写実的な描画技術を買ひ、慶賀を江戸参府に随行させたと考えられる。

シーボルトによる大井川の記録

文政9(1826)年2月15日、11代将軍 徳川家斉への拝謁を目的として長崎を出発した、オランダ商館長 ヨハン・ウィレム・デ・スチュルレル使節一行に、シーボルトは医師として随行した。使節一行には総勢57名の日本人随員が同行し、シーボルトが私的に加えた慶賀のような日本人技術者も含まれた。この江戸参府のルートとしては、長崎-京都間は

陸路・海路を併用、京都-江戸間は往路・復路共に東海道が採用された。文政9(1826)年4月2日、掛川宿を出発した一行は、小夜^{さよ}の中山、金谷宿を通過し、大井川を越えた。シーボルトは自著『NIPPON』の中で、詳細に大井川や川越人足について記録を残し、慶賀に大井川の越し場^{なかつま}や川越人足の姿を描かせた。以下に、シーボルトの大井川越しの際の記録を抜粋する。

「(前略)このあたりは山岳地帯から大井川の激流が広い河床を、現に幾筋かの小さい流れをなして海に注いでいる。丸石でおおわれた約10町の幅の河床は、この川がときおりひどく増水するに違いないことを物語っている。非常に速く流れるいくつかの川筋には橋が架かっておらず、渡河に舟を使うことができない。だから人や荷物は特に鍛えあげた力の強い人の肩車か輦台(ママ)に乗って、状況によってふたりから12人までが交替で支え、流れと闘い水中に浸って向う岸(ママ)へ渡すのである。

(中略)それから観測中に、動かぬようしっかりと輦台にくくりつけておいた駕籠に乗りこみ、大声を出している半人半魚の男たちにわが身を委せた。この熟練した川越え人足(ママ)はたいへん楽々とこの急流を渡ってわれわれを運んでくれた。

ひとりの人は普通川越え人足の肩に乗り、第二・第三の人足がこれを支えて渡り、身分の高い人は大小の輦台で向う岸へ運ばれる。人足自身は特に鍛錬されていなければだめで、彼らはどんな季節でも真つ裸で、ただ陰部をちよっとおおうだけで、一日中この危険な仕事をしなければならぬのである。私が聞いたところでは、彼らは水嵩に応じて80〜96銭を受け取る。もし誰かが人足の過失で流れに吞まれたら、人足は死罪になる、とはっきり言った人があるので、私はこの職業を危険きわまりないというのである。(後略)」⁴

有用植物の採集も来日の目的の1つとしていたシーボルトは、江戸参府時の記録においても日本の植生を中心に記録を残している。植生記録においては、葉や花びらの形、色などを細かく客観的に観察したうえで詳細に記録したが、それ以外の道中目にした日本の習俗や街並みについては自身の見たままの様子を主観的に記した日記調の記録が主である。

²慶長14(1609)年に開始された、オランダ商館長(カピタン)が長崎通商許可に対する御礼のため将軍へ拝謁する行事。寛永10(1633)年からは毎年1回行われ、寛政2(1790)年以降は貿易額半減に伴い4年に1回行われるようになった。

³川越しを行う際の、大井川河原の渡渉地点。

⁴シーボルト著、斎藤信・金本正之訳『日本第3巻』より抜粋。

大井川の記録でもシーボルトの主観的な感想が見られるが、それだけではなく大井川の地形や川越制度の内容、川越人足の仕事ぶりなど現地の人間にわざわざ取材したと思われる記録も多々見られる。その後、シーボルトは翌4月3日に安倍川でも川越しを行ったが、「大井川のときと同じ方法で安倍川を越えた。」としか記していない。興津川や酒匂川さかわがわなど大井川同様に人力の川越しを行っていた川でも簡単な川越人足の記録や「臨時の木橋で渡った」程度の記録にとどまっている。江戸から長崎への帰りの記録においても、酒匂川や興津川、安倍川については特に記録を残していないが、大井川については「島田を過ぎて恐ろしい大井川の川岸につき、行きと同じように川を越えた。」と記し、いかに大井川越しがシーボルトにとって印象的かつ苦難な経験であったかを物語っている。

入れ墨文化の発生と彫り物への変遷

次に、日本における入れ墨文化の変遷から本資料の検討をする。日本人が入れ墨を入れ始めた時期には諸説あるが、3世紀には日本人は入れ墨を身体に入れる文化を持っていたと考えられている。古代中国の史書である魏志倭人伝によると、倭国の男性は入れ墨をしており、海中の魚や蛤を捕らえて食糧としていた倭人は当初入れ墨を鮫除けのために入れていたが、のちに装飾として入れるようになったと言う。8世紀に日本で編纂された『日本書紀』『古事記』によると、入れ墨は地方の人々の卑しく、血生臭い習俗として紹介されており、以後約 1000 年間入れ墨についての記録は見られず、日本史上から姿を消した。

入れ墨が日本史上に再登場したのは、都市文化が花開いた江戸時代である。江戸時代には、動物や妖怪、植物など幅広いジャンルの図柄をモチーフにした入れ墨を入れた民の姿が見られた。江戸期に発生した、身体に1つのモチーフの文字や絵を施す日本独自の入れ墨は「彫り物」⁵と呼ばれ、その原型は江戸時代初期の遊女が入れた「入れぼくろ」と言われる。入れぼくろは、手を繋いだ両者の親指が当たる箇所小さく点を入れるもので、遊女の客への好意を示す証拠として施された。客への恋慕を示す行動には拍車がかかり、剥がした爪や切り落とした指を客に渡す遊女もいた。他にも、自身の腕に客の名前を彫ることで愛の証を示す「起請彫り」^{きしょうぼ}が上方で発生、江戸の遊女へも伝わった。

このような遊女による客への契りの行為や起請彫りは、のちに互いの誓いの印としてやくざに取り入れられるようになったと考えられている。17 世紀後半にはやくざや侠客の間で、仏の加護を祈って腕に「南無阿弥陀仏」などの経文を彫ることが流行となり、下層階級の人々の間でも「南無妙法蓮華経」、「南無阿弥陀仏」などと彫っていたことが記録されており、彫り物が一般民衆にも広がっていたことがわかる。

彫り物の隆盛

彫り物のモチーフとしては、江戸時代初期には経文や題目などの文字が好まれていたが、時代が降るにつれ、龍や般若の面、獄門(生首)、動物、神話、宗教的モチーフなど、具象的な図柄へ変化した。享保元(1716)年以降、武士・庶民の両階級において制度化が勧められた火消は、明和・安永期(1764～1781)頃から様々な彫り物を身体に施した。特に雨を呼ぶと信じられた龍は、火消の間で人気を博した。他にも、飛脚、大工、漁師など様々な肉体労働者が彫り物を施し、漁師の中には水難事故等による死亡時の身元確認のため個性的な入れ墨を施していた者もいたという。

前述した安永期頃までの彫り物は、小さな模様や文字を身体各所に施す、現在のワンポイントタトゥーに近いものであった。慶賀が描いた大井川の川越人足に見られるような全身に具象画を施す彫り物は、1800 年代後半以降に流行した。理由として、江戸時代後半に人気を博した中国の長編小説『水滸伝』^{すいこでん}の影響によると考えられている。文化2(1805)年、式亭三馬・高井蘭山しきていさん ば たかいらんざんにより翻訳された『新編水滸画伝』^{しんぺんすいこがでん}では、葛飾北斎が全身に龍などの彫り物を施した登場人物の挿絵を描き、人気を呼んだ。文政 10(1827)年、歌川国芳が描いた浮世絵つうぞくすいこでんごうけつひやくはちにんのいっこ ひとり「通俗水滸傳豪傑百八人之一個(老入)」では、水滸伝に登場する英雄たちの全身に個性的な彫り物が描かれ、大きな人気を博した。爛熟期にあった浮世絵は、彫り物にも大きな影響を及ぼし、題材は絵画的要素を強め、施術範囲は水滸伝に描かれた英雄に倣って全身へと広がった。その後、月岡芳年、歌川芳艶など国芳門下の浮世絵師が描いた武者絵を中心とした浮世絵も人気を呼び、彼らは彫り物の下絵も多く手掛けるようになった。

生活エネルギーを人力に頼った江戸時代において、肉体労働者は基本的に一丁で業務にあたった。素肌を晒すことへの嫌悪感、勇み肌の競い合い、霊的な祈り、信仰心、業務上の必要性から彼らは様々

⁵享保5(1720)年、江戸幕府は罪人に入れ墨を入れる黥刑を刑罰として採用した。黥刑における入れ墨は「入墨」、「黥」と呼ばれ、これらと区別するために「彫り物」と呼称したと考えられている。

⁶明代の中国で書かれた、個性豊かな 108 人の豪傑が国を救う長編伝奇小説。宝暦7(1757)年、岡村冠山により最初の翻訳本『通俗忠義水滸伝』が刊行され、庶民の人気を博すと、その後も多くの翻訳本やオリジナルストーリーを交えた異本が登場した。

な彫り物を施すようになった。江戸を中心に町人文化が花開いた文化・文政期(1804～1830)の葛飾北斎、歌川国芳らによる「水滸伝」浮世絵ブームは、労働者を中心とした彫り物文化へ急速に受容され、変革を及ぼした。

慶長6(1601)年から江戸幕府が整備を進めた伝馬制度は、ヒト・モノの移動を容易にするとともに、日本全国への文化伝搬、情報伝達速度の向上をもたらした。特に全国屈指の交通量を誇った東海道では、東西都市文化の伝搬や交流が生まれ、東海道沿いの町人や庶民も豊かな文化を享受した。つまり、文政9(1826)年に慶賀により描かれた、全身に彫り物を施した大井川の川越人足も「東海道を通じた文化・文政期の労働者文化の伝搬と受容」という歴史の中に位置づけることができる。

考察

本稿では、資料紹介含め、シーボルトの来日目的と日本文化の記録、江戸時代後期に全盛期を迎えた彫り物文化の点から、大井川の川越人足の新たな実像について検討した。

当時、川越人足は閑取を理想として「川越取^{かわごしとり}」と仲間同士で呼び合い、自身の職業に誇りを持っていた。火消や飛脚同様、川越人足も禪一丁で川越し業務にあたり、自身の肉体を常に晒していたため、個性的な入れ墨を入れることで、仲間同士で勇み肌を競っていたのではないだろうか。また、東海道屈指の難所として知られた大井川では、川越し中に川越人足や旅人が水難事故で命を落とすことも珍しくなかった。全身に個性的な彫り物を施すことで、死後の身元判明の手がかりとしていたとも考えられる。

さらに「川越人足 幽霊と卒塔婆の刺青」に描かれた川越人足は、幽霊や卒塔婆、骸骨、「南無阿弥陀仏」の経文など宗教的モチーフの彫り物を全身に施している。江戸時代に彫り物の題材として好まれた生首や卒塔婆、幽霊などの入れ墨には魔除けの意味が込められていると言われ、経文と共に彫ることで護身の意味も持たせていたとも推測できる。

シーボルトはオランダ政府の命のもと、19世紀初頭日本の記録・資料収集を来日の目的としており、彼が大井川を渡った文政9(1826)年は労働者を中心とした彫り物文化の変革期の渦中にあった。これらのことから、シーボルトが慶賀に描かせた川越人足の浮世絵の信憑性は高く、文政9(1826)年時点で大井川の川越人足の中には彫り物を施していた者もいたと考えられる。

今後も、旧来の大井川関連資料や情報にのみ頼らず、幅広く様々な観点から資料の調査研究を進め、より鮮明な大井川における川越しの歴史を明らかにしていく必要がある。この研究により、明治維新により

途絶えてしまった東海道固有の文化・歴史の一端を知ることができ、後世へ伝えていくことができる。併せて他の安倍川や興津川、酒匂川の川越しの実態や川越人足についても調査を行い、各河川の地域性や街道文化の違いを明らかにすることで、静岡県郷土史のみならず日本交通史、日本風俗史研究の一助としたい。

参考文献

- ・小野友道『いれずみの文化誌』株式会社河出書房新社、平成 22(2010)年
- ・小林淳一『江戸時代 人物画帳 シーボルトのお抱え絵師・川原慶賀の描いた庶民の姿』朝日新聞出版、平成 28(2016)年
- ・シーボルト著、斎藤信・金本正之訳『日本』第3巻 雄英堂書店、昭和 53(1978)年
- ・島田市史資料等編さん委員会『大井川の川越し』島田市教育委員会、平成4(1992)年
- ・玉林晴朗『文身百姿』文川堂書房、昭和 31(1956)年
- ・名古屋市博物館・中日新聞社文化事業部『挑む浮世絵 国芳から芳年へ』中日新聞社、令和元(2019)年
- ・野藤妙「シーボルト・コレクションにおける川原慶賀の動植物画と風俗画」『シーボルトが紹介したかった日本 = Siebold's vision of Japan : 欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために : 人間文化研究機構主催フォーラム・ルール大学共催国際シンポジウム報告書』人間文化研究機構、平成 27(2015)年
- ・山本芳美『イレズミの世界』株式会社河出書房新社、平成 17(2005)年
- ・山本芳美『イレズミと日本人』平凡社新書、平成 28(2016)年
- ・吉岡郁夫『いれずみ(文身)の人類学 新装版』株式会社雄山閣、令和3(2021)年

図1 川原慶賀「OIGAWA」(九州大学附属図書館蔵)



図2 川原慶賀「川越人足 幽霊と卒塔婆の刺青」
(ミュンヘン五大陸博物館蔵)



©Museum Fünf Kontinente

図3 川原慶賀「川越人足 雲龍の刺青」
(ミュンヘン五大陸博物館蔵)



©Museum Fünf Kontinente